

緒 言

福井縣統計書ハ縣下行政其ノ他各般ノ統計ヲ蒐集シ、既往現在ノ狀勢ヲ大觀セムカ爲毎年之ヲ刊行シ、今ヤ昭和六年ノ統計書ヲ編纂スルニ至レリ、本書編ヲ分ツニ其ノ一ヲ「土地戸口等」其ノ二ヲ「學事」其ノ三ヲ「産業」其ノ四ヲ「警察衛生等」ト爲ス。

各編收録スル資料ハ主トシテ市町村及學校ノ報告竝廳内ノ調査ニ依リ或ハ關係官公署會社等ノ供給ニ求メタルモノアリ。蓋シ世運ノ推移學術ノ進展ニ基キ統計ノ用益多キヲ加フ是ヲ以テ調査ノ正確ヲ期スルト共ニ表章方法ヲ更メ或ハ新ニ收録シタルモノ尠シトセス。然リト雖尙遺憾ナキヲ保セザルニ依リ漸次之ガ改善ニ努メ時世ノ要求ニ應セシムル所アラムトス。

昭和八年三月

福井縣知事官房

昭和六年福井縣統計書 第一編

凡 例

本編ハ昭和六年又ハ昭和六年度ノ事項ヲ掲載シタルモノナリ、然レトモ其ノ以後ノ事項ニシテ調査ヲ了ヘタルモノハ之ヲ掲載シ又已ムヲ得サルモノハ昭和五年若ハ昭和五年度以前ノモノヲ掲ケタルモノアリ。

編中何年度ト記スルモノハ其ノ年四月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル一箇年度、何年末ト記スルモノハ其ノ年十二月三十一日現在、何年度末ト記スルモノハ翌年三月三十一日現在、何年ト記スルモノハ其ノ年一月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル一曆年間、何日ト記スルモノハ其ノ日現在ノ意ナリ。

前數年ノ事項ヲ列記シタルモノハ本表ノ數字ト其ノ質ヲ同フシ即チ本表現在數ナルトキハ比較數亦現在數、一年間又ハ一年度間ノ數ナルトキハ比較數亦一年間若ハ一年度間ノ數ナリ。

數位ハ千位百萬位ニ「,」小數アルトキハ一位ニ「.」ヲ附シ不詳ノモノハ「?」一位ニ滿サルモノハ「0」全ク無キモノハ「—」ヲ填入セリ。

金錢ニ關スルモノハ概ネ四捨五入ノ法ヲ用ヒテ圓位ニ止メタリ。

昭和六年 福井縣統計書目次

第一編 土地及戶口等

總 說	1	36 月別出生並死産(現住人)	16
土 地		37 原因別死亡中分類(現住人)	16
1 土地總段別	4	38 年齡及身分別婚姻	17
2 官有地	4	39 夫妻相互ノ年齡別婚姻	18
3 民有有租地地籍及賃貸價格	4	40 夫妻相互ノ年齡別離婚	18
4 民有無租地	5	交通及通信	
5 免租年期地地籍及賃貸價格	5	41 官設鐵道線路及敷地	19
氣 象		42 官設鐵道運輸	20
6 測候所	6	43 私設鐵道	21
7 氣壓氣溫及濕度	6	44 私設鐵道運輸	21
8 平均氣壓	6	45 郵 便	25
9 平均氣溫度	7	46 電 報	26
10 平均濕度	7	47 電信線路及線條	26
11 平均雲量	7	48 電話加入者數	27
12 降水日數及降水量	8	49 市内電話線路及線條	27
13 降雪日數及期節	8	50 市外電話線路及線條	28
14 快晴日數	8	51 電話料收入	28
15 曇天日數	9	52 諸 車	28
16 暴風日數	9	53 海岸延長及港灣	29
17 結霜日數	9	54 港灣ノ狀況	29
18 最多風方位	10	55 燈 臺	29
19 風ノ速度	10	56 浮 標	30
20 風ノ平均速度	10	57 船 舶	30
21 沿海及河川流域雨量	11	58 港灣入港船舶ノ隻數及噸數	30
22 地方暴風雨信號所	11	59 敦賀浦壺斯德間汽船乘客人員	31
23 暴風雨標位置	11	土 功	
24 測候用無線電信機	12	60 水害員數	31
25 地震計	12	61 水害損失價額	31
26 地震計ニ現ハレタル震動	12	62 工事別土木費決算	32
戶 口		63 工種別土木費決算	32
27 世帯及人口	12	社寺及宗教	
28 配偶關係別人口(郡市別)	13	64 神社及神職	32
29 階級年齡及配偶關係別人口(總數)	13	65 寺院及僧侶	33
30 構成人員別普通世帯(郡市別)	14	66 各宗教派別寺院	33
31 推計人口	14	教育慈惠及褒賞	
32 現在人口階級ニ別ナル市町村數及其ノ人口	15	67 行旅病人	34
33 本籍人口及現在人口並現住戶數	15	68 行旅死亡人	34
34 人口動態總覽(現住地別)	15	69 濟貧恤窮	34
35 年齡階級別死亡(現住人)	16		

70	社會事業ノ一(感化教育).....	35
71	社會事業ノ二(育兒).....	36
72	社會事業ノ三(幼兒保育).....	36
73	社會事業ノ四(窮民救助).....	39
74	社會事業ノ五(職業紹介).....	39
75	社會事業ノ六(宿泊救護).....	39
76	社會事業ノ七(公設市場).....	40
77	社會事業ノ八(公設食堂).....	40
78	社會事業ノ九(公益質屋).....	40
79	社會事業ノ十(免囚保護).....	41
80	軍事救護.....	41
81	篤行奇特者.....	41

兵 事

82	壯丁教育程度種別.....	42
83	壯丁體格検査.....	42
84	壯丁身長及體重最高最低.....	43
85	海軍志願兵.....	43
86	日本赤十字社社員及年酬金.....	44
87	愛國婦人會.....	44

議 會

88	貴族院多額納稅議員互選者.....	45
89	衆議院議員選舉.....	47
90	縣會議員選舉.....	48
91	縣會議員選舉無効投票.....	48
92	縣會及縣參事會.....	49
93	市會議員選舉.....	49
94	市會及市參事會.....	49
95	町村會.....	49

官 公 吏

96	縣廳各部分課.....	49
97	休職官吏吏員職員.....	50
98	縣職員(課別).....	50
99	市吏員.....	51
100	町村吏員.....	52

財 政

101	縣市町村水利土功組合歳入歳出.....	53
102	直接稅負擔(決算).....	53
103	國 稅.....	53
104	地 租.....	54
105	所得稅.....	55
106	家督相續稅.....	56
107	遺產相續稅.....	56
108	第三種所得稅種類別決定額.....	56
109	織物消費稅.....	58

110	營業收益稅.....	58
111	酒造稅.....	60
112	國稅滯納人員及金額.....	60
113	租稅外國庫收入.....	61
114	國庫支出縣經費.....	62
115	縣歳入.....	64
116	縣歳出.....	64
117	縣 稅.....	66
118	縣稅滯納處分.....	67
119	特別會計ニ屬スル縣歳入歳出.....	68
120	福井市歳入.....	68
121	福井市歳出.....	69
122	福井市稅.....	70
123	福井市瓦斯事業費歳入.....	70
124	福井市瓦斯事業費歳出.....	70
125	福井市水道事業費歳入.....	71
126	福井市水道事業費歳出.....	72
127	町村歳入.....	72
128	町村歳出.....	74
129	町村稅.....	76
130	市町村稅滯納處分.....	76
131	普通水利組合歳入.....	78
132	普通水利組合歳出.....	78
133	水害豫防組合歳入.....	79
134	水害豫防組合歳出.....	79
135	縣有財產ノ一.....	80
136	縣有財產ノ二.....	81
137	縣有財產ノ三.....	81
138	福井市基本財產.....	81
139	町村基本財產.....	82

其 ノ 他

140	瓦 斯.....	82
141	瓦斯製造高及消費高.....	82
142	瓦斯火口數及料金.....	83
143	令達公布件數.....	83
144	收受發送文書件數.....	83

總 說

位 置

本縣ハ北陸道ノ西南部ニ位シ南ハ北緯三十五度十八分四十五秒ニ始マリ、北ハ北緯三十九度十六分三十八秒ニ終リ、東ハ東經百三十六度四十六分三十秒ニ始マリ、西ハ東經百三十五度二十七分十七秒ニ終ル。

北ハ石川縣ニ境シ東南ハ岐阜縣ニ接シ、西南ハ京都府、滋賀縣ニ連リ、北ハ日本海ニ面シ航路ニ晝夜ヲ隔テテ遠ク浦鹽ト相對ス。

地 勢

越前ハ四面山ヲ圍ラシ、中央ノ一大盆地ヲ所謂越前平野ト爲ス。東北加賀白山ヨリ起レル山脈ハ別山ニ至リ岐レテ二脈ト爲リ、重疊起伏シテ國境ヲ限ル。一ハ國ノ東南ニ走り、大日、油坂、繩帽子、荒島、冠嶽ノ諸峰ト爲リテ極メテ急峻ナリ。一ハ國ノ中央ヲ稍低ク走リテ經ケ嶽、兜山、鷲嶽、淨法寺、丈鏡、劍ヶ嶽等ノ諸山ト爲ル。又國ノ四方ヲ繞ル一脈アリテ國見、鷹巢、越知ノ諸山ト爲リ、山嶽日本海ニ迫リテ平地ヲ見ズ。

河川ハ概ネ東南ノ山間ヨリ發シ九頭龍、加賀、日野ノ三川ト爲リテ西北シテ三國港ニ入ル。其ノ流域ハ灌溉ニ適シ土地肥沃ニシテ五穀豊饒ス。

若狹ハ越前ト其ノ趣ヲ異ニシ、南方三十三間、多田、後瀬、青葉等ノ峯巒國境ヲ限リ北方ニ傾斜シテ海ニ至ル。土地狹ク水田ニ乏シク遂ニ養蠶ノ發達ヲ來スニ至レリ。

廣 表

總面積四千八百八十八方軒ヲ有シ、廣表全國四十六府縣中第三十八位ニシテ、滋賀縣(琵琶湖ヲ含ム)ニ比シ狹ク埼玉縣ニ比シ稍大ナリ。然レドモ本縣ハ山地三分ノ二ヲ占ムルヲ以テ、廣表ノ割合ニ利用面積多シ。

土 地

本縣ノ土地總段別ハ二十三萬五千七百十六町七段、内國有地五千四百六十七町五段、民有地二十三萬二千四百九十九町二段ナリ。民有有租地ハ十八萬二千三百四十二町五段ニシテ民有地ノ七割九分ニ當リ、民有無租地及免租年期地ハ四萬七千九百六十七町七段ナリ。

國有地ハ山林四千七百五十七町一段、公私立學校及官公署敷地七百十町四段ナリ。無租地ハ保安林四萬五千四百七十二町五段、社地百五十二町步、公私立學校及諸官公署敷地百十四町八段、墳墓地百八十一町八段、用悪水路 溜池、砂防地、井溝、堤塘、道路等ハ千二百四十五町四段、其他ノ土地二百七十三町四段ナリ。年期地ハ總ベテ四百六十六町八段步アリ。

氣 象

本縣ハ一方日本海ニ面シ、他方山嶽ニヨリ圍レタル地勢ナル

ヲ以テ、其ノ氣候ハ主ニ海上ヨリノ影響ニ依リ左右セララル傾向ニ在リ。尙溫度ノ如キニ至リテハ、本邦中最タルモノニ屬シ、殊ニ冬季ハ積雪多ク、各種産業ニ影響スル處多シ。昭和六年十二月中ノ平均溫度ハ八十六度ニシテ、同年中ノ平均溫度ハ八十一度ナリ。氣溫ノ最高ハ八月ノ三十六度八分ニシテ、最底ハ一月ノ零下五度七分ナリ。又降水日數ハ一月最モ多ク二十八日、十二月、十月ハ各二十三日、七月、二月ハ何レモ二十一日、其ノ他ノ月ニ在リテモ毎月十日ヲ降ルコト少ク、同年中ノ降水日數ハ二百九日ニシテ、雨天ハ殆ンド三分ノ二ヲ占ム。降水量ハ一、四、七、十、十二月最モ多ク何レモ二百耗以上ニ達シ、一年間ヲ通ズレバ實ニ二千五百五十七耗ヲ算ス。尙昭和五年十二月三日初雪、昭和六年四月八日終雪ナルガ故ニ、降雪期間百二十六日ニ及ビ、最深積雪一尺八寸ニ達セリ。又昭和六年中ノ快晴日數僅カニ三十一日、曇天二百十日、暴風五日、結霜日數六十六日等ナリ。(福井測候所ノ調査ニ依ル)

戶 口

世帯及人口

本縣ノ世帯總數ハ十二萬八千三百八、人口六十一萬八千四百四十四人ニシテ一方里ニ付二千三百七十二人ノ密度ト爲ル。總人口中男ハ三十萬四千五百二十五人、女ハ三十一萬三千六百十九人ニシテ女百人ニ付男九十七人ニ當リ、全國平均女百人ニ付男百一人ニ比シ男ノ割合少キハ纖維工業地タルノ故ナラン。

世帯總數中普通世帯ハ十二萬七千五百四十一、準世帯ハ七百六十七ニシテ、普通世帯ニ屬スル人口ハ總數ノ九割九分ヲ占ム。而シテ一準世帯平均人員ハ普通世帯四人八分、準世帯十四人二分五厘兩者ヲ通シテ四人八分二厘ト爲ル。(以上ハ昭和五年國勢調査ノ結果ナリ)之ヲ大正十四年ノ國勢調査ニ比スレバ、普通世帯ニ於テ二千五百四十二ヲ増シ、準世帯ニ於テ三十四ヲ減シ、人口ニ於テ二萬二千四百五十五人ヲ増加セリ。

人口動態

昭和五年中ノ婚姻ハ六千百十六人、離婚六百九十七人ニシテ出生ハ男一萬四百十三人、女一萬百六十七人、計二萬五千八百八十人ニ達シ、男ハ女ヨリモ二百四十六人多ク生産シタリ。同年中死亡セルモノハ男七千二百三十六人、女七千五百八十八人、計一萬四千八百二十四人ナルガ故ニ出生、死亡ノ差ハ五千七百五十六人ノ自然増加ト爲リ、前年ニ比シ五百七十二人ノ増加ヲ示ス。尙最近十箇年間ニ於ケル平均ハ年五千九百四十人餘ノ増加ヲ示セリ。

原因別死亡

昭和五年中ニ於ケル死亡原因別ヲ示セバ死亡者千人中其ノ最高率ハ下痢及腸炎ノ百五十九人一分ニシテ之ニ亞グハ其ノ他ノ疾患百三人二分、肺炎及氣管支肺炎七十九人二分、老衰七十九人一分、畸形先天性弱質及乳兒ニ固有ノ疾患七十二人三分、肺結核六十一人三分等ハ最モ著シキモノナリ。

交 通

道 路

交通ノ狀況ハ國道、府縣道ノ總延長百八十四萬二千八百八十四米ニシテ、面積ニ比シ少カラザルモ、山地割合ニ多キ關係上其ノ一部或ハ峻路峻坂ト爲リ、或ハ幅員狹少ト爲レルヲ以テ、毎年之ガ改良ニ比較的多額ノ經費ヲ投シツ、アリ。殊ニ昭和三年度ヨリ同六年度ニ互リ、縣下各地ニ道路開鑿ヲ計畫シ、之ガ總工費三十五萬二千五百圓ヲ以テ工事施行濟ナリ。

鐵 道

鐵道ハ總延長三百三十軒餘ニ達シ、北陸本線、小濱線、三國線ノ外私設鐵道七線アリ。更ニ計畫中ニ屬スル越美線ノ開通ヲ見ルトキハ、交通上裨益スル所多大ナルベシ。

諸 車

諸車ハ昭和六年末現在ニ於テ馬車九百六十五臺、牛車百三臺、荷車二萬七千二百三十三臺、人力車三百八十三臺、自轉車四萬八千五百四十六臺、自動車五百四臺、其ノ他ノ車千六百六十二臺、總計七萬八千八百七十六臺ニ達ス。而シテ此等ノ内自轉車ハ急進的ニ自動車ハ漸進的ニ増加シ、人力車ハ自然減少ヲ示セリ。

社 寺 及 宗 教

神 社 及 神 職

昭和六年末本縣ノ神社總數ハ千六百八十一社、神職百七十八人アリ。内官幣大社一、官幣中社一、別格官幣社一、國幣中社二、國幣小社一、縣社二十五、郷社四十七、村社千二百七十一、無格社三百三十二社等ナリ。

寺 院 及 僧 侶

本縣ノ宗教ハ佛教最モ盛ニシテ、昭和六年末ニ於ケル寺院總數ハ千六百五十四、僧侶千六百一人ニ達シ、寺院一ニ付世帯數僅ニ七十七ニ當ル。寺院ヲ宗派別ニ觀ルトキハ、眞宗八百七十四最モ多ク、縣下寺院ノ半ヲ占メ、之ニ亞グハ曹洞宗二百七十二、日蓮宗百三十三、天台宗百十一、淨土宗九十七、臨濟宗八十三、眞言宗六十二、時宗二十、黃蘗宗二等ナリ。

兵 事

昭和六年ノ壯丁体格検査人員ハ六千五百二十二、内甲種千六百三十九人ニシテ總員ノ二割五分ニ當リ、第一乙種四百五十三人(七分)、第二乙種千四百五十二人(二割二分)ト爲ル。又丙種二千五百九十四人、丁種三百七十九人、戊種五人、此等ヲ併セテ四割六分ニ當ル。

教育程度ハ高等學校卒業以上及同等ノ者百七十二人、中學校卒業及同等ノ者七百二十一人、高等小學校卒業及同等ノ者三千七百七十六人、尋常小學校卒業及同等ノ者千六百八十九人、尋常小學未卒業及不就學者二百四十一人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレバ尋常小學未卒業及不就學者ハ、漸次其ノ數ヲ減シツ、アリ。又検査人員中身長ノ最高ハ一米八五〇、最低一米三〇六、体重ハ八十五斤五〇、最輕二十九斤七〇ナリトス。

官 公 吏

縣 職 員

昭和七年四月一日現在ノ本縣職員ハ千四百二人ニシテ、其ノ俸給年額八十一萬九百三圓ト爲ル。内勅任一人、奏任十七人、同待遇四十八人、判任百四十七人、同待遇六百六十七人、縣吏員百八十人、僱員(雇員ヲ含ム)三百二十人、囑託二十二人等ナリ。

市 吏 員

昭和六年末現在ニ於テ市長、助役、收入役各一人、主事三人、技師四人、書記五十一人、技手二十一人、事務員三十五人、囑託一人、總數百十八人ニシテ此ノ俸給年額ハ八萬二千四百四十八圓ナリ。

町 村 吏 員

昭和六年末現在ニ於テ町村長百六十七人、助役百六十六人、收入役百五十五人、區長二千四十二人、同代理者千九百九十七人、書記六百六十三人、事務員六十八人、技術員二十五人、常設委員八百二十三人、其ノ他四人、總數六千二百二十二人ト爲リ、内名譽職ヲ除キ有給吏員ノ俸給年額ハ、三十五萬三千八百八十八圓ナリ。

財 政

縣

縣財政ハ明治十四年即チ置縣當時ニ有リテハ、僅ニ二十八萬三千餘圓ニ過ギザシガ、日清戰役以來事業ノ勃興ト法令ノ結果ニ依ル等漸ク經濟ノ膨脹ヲ來シ、明治二十九年度ニ至リテ約三倍ニ上リ、加フルニ水害復舊工事ニ依ル縣債償還及九頭龍川改修事業ニ對スル支出等ニ依リ年々縣費ヲ増嵩シタリ。茲ニ於テ縣民ノ負擔軽減ヲ圖ルノ必要ニ迫リ、明治三十五年及同三十七年度ノ兩回ニ互リ、極力財政ノ整理ヲ斷行シタルモ、戰後ノ經營ト時運ノ進歩ニ伴ヒ、益々財政ノ膨脹ヲ來スニ至レリ。加フルニ其ノ後郡制ノ廢止ニ依リ、自然縣事業ノ増加ヲ來シ、縣費ハ愈々膨脹シタルヲ以テ、大正十二年政府ノ旨ヲ体シテ一大整理方針ヲ樹テ、事業費、事務費ヲ通シテ極力整理緊縮ヲ政行シ、爾來其ノ方針ヲ以テ進ミタルモ、法令ニ依レモ其ノ他縣民ノ福利増進上已ムヲ得ザルモ等アル爲、昭和六年度ノ決算ハ、六百二十二萬三千三百三十九圓ニ上ルニ至レリ。之ヲ前年度ノ決算ニ比スレバ、四十五萬三千三百四十八圓ヲ減シ、大正十年年度決算三百九十五萬七千餘圓ニ比シ、二百二十六萬六千餘圓ノ増加ヲ來セリ。

市 町 村

市町村ノ財政狀況ヲ觀ルニ、昭和六年度ニ於テ市費六十萬六千七百三十六圓、町費四百九十五萬四千七百十六圓(何レモ豫算)ニシテ、之ヲ市町村制實施ノ翌年タル明治二十三年度ニ比スレバ、市町ノ通シテ實ニ約十七倍ニ達セリ。縣ハ不斷銳意緊縮方針ヲ以テ之ヲ率フル所アリシモ、社會ノ進展ニ伴ヒ教育、土木、業其ノ他各般ノ施設ニ迫ラレ、自然膨脹ヲ餘儀ナカラシメルニ外ナラズ。

諸 稅 負 擔

昭和六年度ノ本縣ニケル租稅負擔ノ狀況ヲ見ルニ、直接國

税百五十九萬六千七百七十六圓、縣稅總額二百七十四萬五千九百八十九圓、市町村二百八十七萬三千八百一圓ニシテ、之ヲ一世帶當ニ觀ルニ、直接國稅十二圓五十一錢、縣稅二十一圓五十三錢、市町村稅二十二圓五十一錢ト爲ル。

港 灣 (敦賀港)

港 灣 ノ 修 築

本港ハ大正二年港灣改良工事竣成後、更ニ大正十一年度ヨリ同十八年度ニ亘ル八箇年ノ繼續事業トシテ、港灣修築計畫成リ、國費三百四十萬圓ヲ以テ大正十一年九月十四日之レガ起工式ヲ舉行セリ。然ルニ大正十三年政府ノ都合ニ依リ一箇年繰延、昭和五年度ニ於テ竣工ノ豫定ナリシモ、更ニ一箇年延長セラレ昭和六年度ニ於テ完成シタリ。而シテ本計畫ハ、新ニ延長四百二十三米ノ繫船岸壁ト約百六十三米ノ護岸ト、三百八十米ノ防砂堤及既設防波堤ヲ更ニ五百十米延長シタルモノニシテ、之ガ爲メ一箇年約五十萬噸ノ貨物ヲ取扱フコトヲ得ベシ。

水 深 ノ 變 化

港内廣潤ニシテ水極メテ深ク、暗礁砂洲等障害物ニ乏シク、隨ツテ大船巨艦ト雖モ運航自在且緊要安全ナリ。船舶ノ集落地點ハ、陸岸ヨリ二百米乃至二百七十米ニシテ、潮位及潮流ハ零位ヨリ六十釐迄ヲ最高トス。

港 灣 ノ 消 長

敦賀港ハ古來江州農尾並ニ近畿地方トノ水陸連絡ノ要港タルノミナラズ、北海道ニ對スル移出入貨物ノ集散地トシテ夙ニ世ニ知ラレタリ。且地理的關係上對外的ニハ、遠ク神功皇后三韓出師ノ當時其ノ策源地タリシ所ナリ。其ノ後或ハ外國使臣來朝ノ應接地ト爲リ、又ハ政事軍事上ノ中心ト爲リシ歴史ヲ有ス。故ニ維新以後政府ハ本港ノ開發ニ意ヲ用ヒ、明治十四年樽口ニ燈臺ヲ新設シテ航路ノ安全ヲ計リ、又明治十七年敦賀、長濱間ノ鐵道ヲ敷設シテ、近畿地方トノ交通ヲ便ナラシメ、續テ明治二十九年十月當港ヲ特別輸出港ト指定シ、同三十二年七月開港令ノ公布セラルルヤ當港ヲモ亦其ノ一ニ加ヘラレタリ。其ノ後西伯利亞鐵道ノ全通スルニ及ビテ、歐人ノ東洋ニ遊ブモノ多クハ此ノ便ニ依ルヲ以テ、旅客ノ往來日ヲ追フテ頻繁ト爲リ、貨物ノ集散モ隨ツテ増加スルニ至レリ。爾來政府ハ本港修築ノ必要ヲ感ズルニ至リ、第二十五議會ノ協賛ヲ經テ、明治四十二年以降四箇年ノ繼續事業トシテ工費金八十萬圓ヲ以テ第一期修築工事ヲ起シタリ。該工事ハ大正二年度ニ於テ竣工セシモ、間モナク歐洲戰爭勃發シタル結果本港ハ我國ニ於ケル軍事上將又經濟上愈々重要ノ地位ヲ占ムルニ至レリ。加之貨物激増シ、第一期ノ修築工事ノミニテハ、設備ノ不足ヲ告グルニ至レルヲ以テ、更ニ第二期修築工事ノ必要ヲ認メ、第四十五議會ノ協賛ヲ經テ更ニ大正十一年度ヨリ之ガ工事ヲ起スニ至レリ。然ルニ大正十二年九月一日ノ關東地方震災ノ爲メ八箇年繼續事業ヲ一箇年延期セラレ、昭和五年度ニ於テ竣工ノ豫定ヲ更ニ一箇年延期シ昭和六年度ニ完成ノ運ビニ至レリ。次ニ歐洲大戰中非常ナル發展ヲ遂ゲタル我對外貿易モ戰後ノ財界變動ニ因リ漸次衰頹ヲ來シ、其

ノ後甚シキ激減ヲ示スニ至レリ。而シテ昭和六年中當港ヨリノ移出ハ二萬八千三百十噸、價額百四十七萬八千七百八十七圓、移入ハ二十萬四千七百七十八噸、此ノ價額千六十三萬三十四圓ニシテ、移出ノ重ナルモノハ雜貨及藥製品トス。雜貨ハ鐵道便ニ依リ京阪地方ヨリ輸送シ來リ北海道、北鮮(元山、城津、清津)方面露領亞細亞及中華民國方面ニ、藥製品ハ兵庫、滋賀、三重ノ各縣ヨリ産スルモノ及縣内産ヲ併セ北海道及北鮮地方ニ移出セラル。移入ノ重ナルモノノ内石炭ハ北海道及九州地方ヨリ移入シ、多クハ鐵道用炭トシ、其ノ他ハ本縣下及滋賀縣下ノ工業用炭トシテ消化スルモノトス。尙穀類、鮮魚、塩魚、魚糟類ハ北海道、朝鮮方面ヨリ縣内ハ勿論、滋賀、京阪神及名古屋中央線一圓ニ移出セラルル狀況ニ在リ。